

<「知るっば!久留米」 令和2年6月4日(木) 12:30~放送分>

## 久留米の防災 ～第1回～ 久留米の梅雨

<ゲスト：久留米市防災対策課 主査 湯口 秀隆さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

6月は雨のシーズンということで、『久留米の防災』というシリーズで4回に分けてお送りします。

今回のゲストは、この方です。

ゲスト:湯口秀隆さん (以下「湯口」)

久留米市役所総務部防災対策課の湯口と申します。

今日は、よろしくお願いします。

坂本 『久留米の防災』シリーズ第1回のテーマは、『久留米の梅雨』です。

久留米は、昔から水害と向き合ってきた歴史があります。

まずは、これまでに起きた梅雨時期の災害について教えてください。

湯口 まず、久留米の川といえば筑後川が思い浮かぶと思います。

今でこそ、筑後川の河岸はきちんと堤防が整備されて久留米市民の癒しスポットになっていますが、昔から別名『筑紫次郎』とも言われる日本三大暴れ川のひとつとされています。

その筑後川の歴史は古いのですが、大きな水害のひとつが、私たちの祖父母からよく聞かされた昭和28年の大水害だと思います。

久留米市でもいたるところで堤防が決壊し、橋が流されたり、街中が浸水したと聞いています。

この六ツ門のシティプラザがある所は、昔は井筒屋デパートの前身の旭屋デパートがありまして、ここも1mから深いところで3mぐらい浸水したと聞いたことがあります。

坂本 私は市役所の広報担当をしているのですが、今は『広報くるめ』ですけど、昔は『市政くるめ』というタイトルで広報誌が出てまして、その創刊が昭和28年なんですね。

ちょうど水害の年で、その創刊第6号でこの水害の特集がされています。

その1面のタイトルが『水魔、荒れ狂う』でして、『雄々しき再建を誓う』という当時の久留米市長のコメントが載っていたり、見開いた2面、3面で『未曾有の水禍、恐怖のまち』ということで、水に浸かった街の写真や橋の鉄橋に材木が引っかかっている写真、避難をなさっている当時の市民のみなさんの写真など非常に生々しい写真が掲載されています。

なんかすごく迫力があるというか、詰まるものがあります。

湯口 今では考えられない写真ですね。

坂本 すごい写真が残っているなどと思います。

筑後川河川事務所のページを見ますと三大水害というのがあって、これが明治22年、大正10年、そして昭和28年、この3つが三大水害と言われています。

この昭和28年の水害では、瀬下町の水位が9mを超えていて、これが最も大きな水害だったと言われていますね。

近年も水害が起きていますが、記憶に新しいものでどんなものがありますか？

湯口 そうですね、まず私が記憶しているのは、最近ですと平成24年7月に続けて2回も豪雨があったことです。

この時は色々な場所で山崩れが発生してしまっていて、特に田主丸のワイン工場で大きな山崩れがあったことを記憶しています。

坂本 当時、私は市の農政部所属だったので、復旧がものすごく大変だったのを覚えていますね。

湯口 その時は高良川の堤防が崩れまして、市全職員に集合がかかって、近くの小学校で雨の中、土のう作りをしたということもありました。

それから、次に記憶の新しいものとして、一昨年（平成30年）7月豪雨がありました。

この時は市内の総雨量が460mm、最大時間雨量が71.5mmということで、大雨特別警報が出されました。

この時は、筑後川の水位がかなり上昇したことにより、多くの支流で本流から水が逆流し、内水氾濫により約1600件の浸水被害が発生しています。

それから、昨年の令和元年には、7月と8月に2回の豪雨がありました。

この7月の雨は、線状降水帯というのが発生した影響もあって、20時間雨量が335.5mm、最大時間雨量が90mmと観測史上最高の記録的豪雨でした。

その1ヶ月後の8月にも、20時間雨量が330mmということで、これが8月における観測史上最高を記録する豪雨でした。

坂本 ここ数年、観測史上最高というのが続いているんですが、それってどんな状況でそうなってるのでしょうか？

湯口 ここ数年の異常気象については、久留米だけでなく日本全国、そして世界的な問題だと言われています。

気象庁でも色々な専門家の方が原因について研究していますが、地球温暖化が大きな要因の一つと言われています。

ただ、一概に地球温暖化といっても漠然としていますが、例えば、天気の良い日に水たまりがすぐ乾いてしまうように、地球の温度が高いと海水が蒸発してたくさん水蒸気になってしまうんですよ。梅雨時期は、気圧と気圧の谷間に流れ込んだ水蒸気を含んだ空気が、冷気に一気に冷やされて

雨を降らせるという状況です。

そして、近年、この水蒸気の量が多くなってきていることが、異常気象を起こす原因の一つだと言われていています。

それから、最近よく『線状降水帯』という言葉を目にする機会が増えてきましたが、特に激しい雨を降らせる積乱雲が、線状に発生するものです。

この線状降水帯の発生のメカニズムはある程度解析されているのですが、予測については気象庁のスーパーコンピューターをもってしても難しいと気象庁の方が言っておられました。

坂本 線状降水帯の予測は難しいんですね。

まだまだ自然の力は、人の力を超えてるんですね。

梅雨時期の天気図を見てても、雲はどんどん発生しますもんね。

久留米には筑後川以外にも色々な河川がありますし、土地も山間部や平野部があって高低差もありますが、それらが天候に影響や特色を与えたりしてるんですかね？

湯口 そうなんです。坂本さんの言われるとおり、久留米市には大きな山やたくさんの川がありますね。自然豊かな都市である一方で、その分、危険もたくさんあります。

まず、山については、みなさんもお存知のとおり、久留米には耳納連山があります。

福岡県の調査によりますと、耳納連山は勾配が急な地形で、地質は剥がれやすいシート状の構造となっており、風化が進むと軟質化、つまり柔らかくなるという特徴があるようです。

ですので、集中豪雨が発生しますと、土石流や地すべり、急傾斜地の崩壊などが発生する可能性が高いということです。

坂本 山はちょっと怖い気がしますね。

では、川についてはどうですか？

湯口 久留米市には国が管理する一級河川の筑後川、そして、その筑後川に流れ込む多くの中小河川があります。

勾配が急な耳納連山の山間部から流れた水が、勾配の緩やかな平野部に流れ込み、そこに溜まって浸水が起こりやすい地形だと聞いています。

坂本 水害は、起こるべくして起こったところもあるのかなあと思いました。

湯口さん、ありがとうございました。

久留米市では、大雨が降った際の危険箇所を詳しく確認できる『ハザードマップ』を公式ホームページでもご覧いただけます。

また、緊急速報メールやドリームス FM の緊急告知防災ラジオなどで、避難情報や災害情報を発信しています。

大雨に備えて、防災意識を高めていきましょう。

今日は久留米の大雨の歴史や梅雨時期の状態を教えてくださいましたけれども、次回は『大雨の備え』をテーマにお届けします。